

## 影なる王女



## 終章

阿礼……。

ああ、見える。

その、剣の傷だらけの甲冑。

縮れた黒髪。

吾田媛……。

今は夢の中。

眼が醒めたら、見えない。

ああ、笑っている。

赤子のような笑顔。

もはやこの世にはない吾田媛

何故に笑う？

おおとものかなむら、おすがのおおきさき、  
大伴金村は、春日皇后だけではなく、吾田媛が産んだ稚建大王と影皇女をも共に  
殺すだろう。

あゝの皇子皇女が、呪われた小碓皇子の胤であるが故に？  
否。

呪われたヤマトの大王家の滅びを言祝ぐが故に？  
吾は……。

確かに、飯豊をして、金村に春日皇后を誅せしめるよう促した。  
それとは言わず、かの十二歳の巫女が、そう命じるようにした。

吾は、ただ記するのみという史人の務めを越えた。

それが禁忌を破ったことになるか否かは分からない。

吾田媛……。

何故に笑う。

吾を責めぬのか？

ああ……。

消えて行く……。

吾田媛……。

明け切らぬ夜の冷たい気が、頬を撫でた。

やはり……。

稗田阿礼は、半身を起こし、闇のなかで微笑んだ。

眼が醒めれば……見えぬ。

十七年前、思い出しても身の毛のよだつ激痛のなかで、阿礼は両眼と舌と両手を失った。

比叡の山中にうち捨てられ、気を失った。意識を取り戻したとき、いくら瞼を押し上げても闇しか見えず、阿礼は泣き叫び、地に転がって己が運命を呪った。

今は、たとえ眼は見えずとも、音や肌に触れる気の動きで、四囲の様子はほぼ伺える。

笹葉という口と手も得た。

いまや事は大きく動き、彼女から視覚と言葉と、そして記するべき手を奪ったヤマトの  
大王家は滅びに瀕している。

嬉しくなくはない。だが、その滅びが、他ならぬ吾田媛の二人の遺児をも巻き込むこと  
に、胸の痛みを覚えぬはずがない。

影皇女。

吾田媛とよく似ているという皇女に会ってみたい。

「阿母よ」

笹葉の眠たげな声でした。

「もう、醒めたのか。まだ、暗いぞ」

阿礼は、声の方に貌を向けて微笑み、褥から出た。寝屋の隅に、砂の入った桶がおい  
である。阿礼は、桶の傍らに膝をつき、手首で字を書いた。

笹葉が起きあがって近寄り、桶を覗き込み、小さく叫んだ。

「阿母」

笹葉は詰るように言った。

「ヤマトのうちには、阿母の貌を見知る者もいよう。兵も厳しく境を固めていよう」  
阿礼は頷いた。

「それでも、ヤマトへ行くというか」

阿礼は、桶の砂に字を書いた。

「……影皇女」

笹葉はうなるように呟きため息をついた。

「それほど、吾田媛に似た皇女に、会いたいというのか」

阿礼は深く頷き、立ち上がった。壁にかけた衣に手を掛け、肌衣の上に重ねた。

「阿礼と笹葉の姿がないと？」

暗闇は徐々に蒼い色合いを帯びつつあった。高志の王は、兵が汲んできた桶の水で貌を洗いながら問うた。

「いづくへ消えた？」

報告のため高志の王の寝屋に入った鹿虫は、ためらいがちに告げた。

「それが……桶の砂に文字が残されていて……」

「文字？」

「影皇女に会いに、ヤマトへ行くと」

「ヤマトへ？」

高志の王は声を荒げた。

「見張りの兵は何をしていた？ 鹿虫、すぐに後を追わせよ！」

翌日。

闇のなかを、大伴おおともの金村かなむらは独り、王宮の門前に立っていた。

手はすべて打った。

かつて春日皇后に味方し、金村を蔑ろにしていた大伴の若者たちは、すべて説き伏せた。彼等の多くは、かつて春日と交わっていた。だが、男は情ではなく名目に従う。まず憤り、ついで悲しんだ若者たちは、涙が涸れた後は、如何に障りなく春日皇后を葬るか、談合を始めた。

そして、結論は出た。

稚建大王や影皇女をも、ともに誅するしかない、と。

その様を見ながら、金村は胸の奥底に、どす黒い思いが渦巻くのを覚えていた。吾も、若者どもも、卑しい、蔑まれるべき人ども。そして、政事まつりごとは、卑しい気性を満たすためにあるもの。

娘である春日皇后、その側に常に侍る影皇女。彼らの気高さは、吾等にはない……。

金村は、そつと門を叩いた。

ゆつくりと、音を立てぬように、門が開かれた。

門のうちより、春日皇后の異母弟である狭手彦が貌を覗かせ、意味ありげにうなずいた。そのわけしり貌を、拳で思い切り殴ってやりたい衝動に、金村は包まれていた。

寝乱れた娘の貌が、青闇のなかに浮かび上がっていた。官能的に半ば開いた唇が、夜中の快の余韻を求め、かすかに動いている。

金村は、足音を偲ばせて寝屋に入り、春日皇后の傍らに坐した。

彼女が毎夜、稚建大王や影皇女が寝入った後、かつて肌を合わせた大伴の若者たちに与えた寝屋に忍んでいる。そう聞いて金村は、狭手彦に彼女とまぐわうよう命じた。まぐわう前に、薬の入った酒を飲ませておくように、と。

すでに狭手彦は寝屋を去っていた。今頃、兵を動かし、蟻一匹這い出る隙間もなく王宮を囲ませつつあるに違いない。

金村は、蓐の傍らに膝をつき、つくづく春日の寝顔を見つめた。白い絹の肌衣に身を包んだ娘は、絹の蓐を掻き抱くように臥し、乱れた裾から白い脚が伸びていた。ふつくらとした頬、閉じられた瞼、長い睫。

金村は、腰に帯びた短剣を外し、床に置いた。胸を一突き、眠ったまま苦しまぬように止めを刺すつもりであった。だが、間近に見るうちに、滑らかな白い四肢を刃で傷つけるのが躊躇われた。

この寝屋でまず春日の命を奪い、しかる後に大王の寝屋へ向かい、稚建大王と影皇女を

刺殺する。一族の者を巻き込むことなく、すべて己が手で行う。もし、仕損じることがあったその時は、外を囲む兵で漏らさず討ち取る手筈だった。

それしかない……。

住吉の邸を出でて、難波へ至るまでの間、馬に揺られつつ、あらゆる苦しみと悲しみが脳裏を去来し、王宮の屋根が見え始めたころ、それらの感情を押し鎮めていた。大伴のため……、ヤマトのため……民のため……。

金村は、寝入ったままの娘の前に、不思議と落ち着いている己に驚いていた。妻どもに産ませた多くの子らのうち、もっとも愛でた娘を、己が手にかけることに、いささかの逡巡も覚えぬことが恐ろしくすらあった。

金村は、両手を伸ばした。そっと仰向けにし、覆い被さるようにして左右の親指の腹を喉笛に押し当て、力をこめた。

「……………っ！」

苦しげにもがく春日の両眼が見開かれた。空気を求めて激しく開閉する唇から、必死で悲鳴を発しようとして、声にならず、ただ、見開かれた眼が哀しげにゆがみ、眼尻から涙があふれ出した。

金村の心が揺らいだ。喉笛を絞める両手の力が一瞬緩んだ。春日は両手で金村の胸を突いた。金村の両手が、彼女の首から離れた。すかさず、春日は右膝を思い切り突き上げた。

覆い被さっていた金村の脚の付け根に彼女の膝が食い込んだ。金村が呻きをあげ、眼を閉じた。

春日は、両手で股間を押さえて突っ伏した金村の軀の下から這いだし、寝屋の隅まで駆け、壁に背中を押し付け、振り返った。金村は、春日の尊にうつぶせに倒れ、動かない。春日は、膝の力が抜けたように座り込んだ。激しく咳き込み、噎せる喉を手で押さえ、やがてしわがれ声を絞り出した。

「何故に……」

金村は応えなかった。激痛が、この老人からすべての力を奪い去っていた。

「何故に……吾を……」

「赦せ……」

金村は貌を伏せたまま呻いた。

「国のため……民のため……」

「民……？」

哀しげに歪んでいた春日の面持ちが、しだいに冷たく強張っていった。

「民のために吾を殺すと？」

「高志や且波の王が……汝を誅すれば、ヤマトを攻めぬと……」

金村はやつと貌をあげた。春日はゆっくりと立ち上がり、情けなく這いつくばる父を、氷のような眼差しで見おろした。

「彼等の兵は千。吾等の兵はせいぜい五百……勝ち目はない。それ故、彼等と談合した」

春日は父から眼を逸らし、ため息をついた。金村は続けた。

「ヤマトの民を、軍で苦しめたくはなかった」

「吾一人を殺せ、と高志や且波は言い、父は諾したのか」

「……然り」

「何故に吾一人？ 大王は、如何するのか」

「大王を誅せよとは、彼等は言わなかった」

「何故？」

「彼等は……いま、ヤマトの政事を動かしているのは、汝である……」

「吾が……？」

春日はかすかに笑った。

「で、吾を誅し、その後は如何ようになる」

「稚建大王は、大王の御位を彦湯皇子三世の王孫に譲る」

「王孫が、やはり高志におわしたか」

「おわした……」

「如何なる王孫であったか」

「十二歳の皇女……名は飯豊」

「十二歳の皇女をヤマトの大王に即け、高志や且波になんの利がある」

「ヤマトの大王にはならぬ」

金村は、訝しがる春日皇后をまつすぐに見つめて言った。

「ヤマトと高志、且波は、飯豊皇女を奉じて一つの国となる」

「一つの国……」

「飯豊皇女は、流浪の身で、北の邑々の諍い争いを鎮めた巫女。憎しみ合い、殺し合う世を終わらせるには、この巫女を大王とし、国々が連合する他に手はない」

「そうか……」

春日皇后は眼を伏せた。

「大王はあのような方、国を譲れと銘ぜられれば譲る……障りとなるは、吾ただ一人」

「赦せ、春日……」

金村は床に額をつけた。

「吾は……」

春日は、背を伸ばして貌を上げ、声を震わせた。

「父の意のままに動いた」

「……然り」

「父よ。大伴金村は幾人を殺した」

金村は応えなかった。

「多くの人を殺したあげく、己が娘を殺すのか」

ふと、春日は眼差しを外へ向けた。わずかに開いた窓の外は、桃園だった。桃樹の木の  
間から、足音を忍ばせて移動する甲冑をまとった兵の影がかいま見えた。

「さすが父よ。策は十分に練っている」

春日は、淋しげに笑った。

「吾が逃げ延びる術はないのだな」

「汝を、他の者の手に掛けさせはせぬ」

金村が貌を上げた。

「せめて、吾が手で」

不意に、金村が立ち上がった。手に、さきほど床に置いた短剣が握られていた。鞘を  
うと同時に、金村は駆け、春日に軀ごとぶつかった。

呻きが洩れた。

春日の声ではなかった。

金村の短剣はわずかに逸れ、切っ先が春日の肌衣の袖を縫って壁に突き立っていた。

春日は、右膝を上げ、父の股間を過たず蹴り上げていた。

金村は白眼を剥き、ゆっくりとくずおれた。

春日はしばし、父を見つめた。

国のため。

民のため……。

かつて、様々な名分を掲げ、多くの者を殺し、ヤマト随一の豪族に成り上がった父。皇后の父として権勢を振るうためか。

それとも、息長皇后のおおききおきながのおおききの暴政のなかで生きのびるための、やむなき術だったのか。いずれにせよ……、背を丸め、股間を両手で押さえ、唇をだらしなく開けて痙攣する父の姿は、滑稽以外の何物でもなかった。そんな滑稽な男どもに、むざむざと殺されてなるものか……。

春日は、肌衣の袖を壁に縫いつけている短剣を抜こうとした。だが、切っ先は深々と壁に食い込み、微動だにしなかった。

春日は、肌衣を脱ぎ捨てた。

白い裸身をさらし、すらりと背を伸ばし、毅然と貌を上げ、ゆっくりと寝屋を出た。

「春日か……？」

背後で、大王の声がした。

「春日である」

大王の寝屋の鏡の前で化粧をしていた春日皇后は、ゆっくり振り返り、婉然えんぜんと微笑んだ。

稚建大王は、蓐しとねから半身を起こし、傍らを見やった。影皇女が少し離れた褥にくるまり、巨きな軀を猫のように丸め、寝息をたてている。

「春日よ……」

大王は破顔した。

「そのなりは？」

春日皇后は、甲冑を身にまもっていた。露わな肩を紫の巾スカーフで覆い、胴に黒塗りの裾短かな甲冑を巻き、やはり紫に染めた帯に剣を提げ、長い髪をおろして額に白い布を巻いている。

「大王の知らぬ間に作らせた」

皇后は、厚く紅を塗った唇を広げて笑った。

「影皇女にも甲冑を着せ、木の剣を撃ち合って遊ぶこともある。今は、そこらの兵に負けぬほど上達した」

「朝餉あさげもまだであろう」

大王は褥より出で、座った。

「夜も明けぬうちに、皇女と剣をで遊ぶというのか？」

「否」

皇后は大王の間近に歩み寄り、膝を床に突き、いとしげに眼を潤ませ、右手を伸ばして寝乱れた大王の髪を丁寧に整えた。

「外にある大伴の者どもと、剣を交えるために」

王宮の扉の前の広庭に、大伴狭手彦が弓を携えた五十の兵を従え、息を殺していた。

遅い……。

そろそろ、父が三人の息の根を止め、姿を現してもいい頃合いだった。

王宮に仕える下部や宮女は、すでに昨夜のうちに外に出してある。たとえ金村が仕損じても、騒ぎが外に漏れることはない。金村からは、日が出てなお戻らねば、火矢を放ち、王宮ごと三人を焼き殺すよう命じられていた。すでに夜は白み、山の端はの雲が茜色に染まり、日の出の間近なことを告げている。

「火矢を整えよ」

狭手彦は、傍らの兵長に命じた。兵どもが鏃やじりに布を巻いた矢を壺の油に浸し、あちこちで火打ち石を撃ち合わせる音が響いた。

「では……金村は、吾ではなく汝を……」

声を詰まらせる大王に、春日は深く頷いた。

「然り。それが国のため、民のため、と」

春日の眼は澄み、面持ちも声音も落ち着いていた。大王は重ねて問うた。

「金村は？」

「ぶぐり玉を蹴られ、気を失っている。今しばしは目覚めまい」

春日は涼やかに笑った。

その声に、影皇女が目覚めた。身を起こし、甲冑をまとった春日に眼を止め、邪気なく

笑い、すり寄ってきた。

「目覚めたか」

春日は、影皇女の肩を抱き、皇女は春日に頬を擦り寄せた。

「汝も、疾う甲冑をまとえ。剣で遊ぼうぞ」

皇女は頷き、立ち上がって寝屋を出た。

「……で、如何する？」

沈痛な面もちで問う大王に、皇后は居住まいをただした。

「影皇女とともに討って出で、血路を開く」

「大伴の兵どもは、百を越える。汝と皇女と二人で逃げ延びるといふのか」

「他に手だてはない」

春日皇后は、まっすぐな声音で応えた。

「吾がおとなしく誅されれば、事は平らかに治まるのであろうが、むざむざ殺されたくはない」

「では、吾も汝等と共に討って出る」

「否」

皇后はゆっくりと首を振った。

「高志も且波も、大王を誅すべしとは言っていない」

「汝等と別れ、生き延びる気はない」



「吾が生き延びるに、大王は足手まとい」

面持ちを引き締め、叱るように言う皇后に、稚建はたじろいだ。

「影皇女は独りで七十の兵を討った。あるいは吾独りならば、守り抜いて王宮を出でることも出来よう。しかし、大王と吾と二人を守るは難い。大王は武においては、まるで頼りにならぬ」

俯く大王を、皇后はあやすように肩を叩いた。

「生きていれば……いずれ逢う折も来よう」

足音も荒らかに、影皇女が武装を終え、寢屋に戻ってきた。朱塗りの甲冑に、深紅の巾を垂らし、黒い帯に大剣を提げ、嬉しげに息を弾ませている。

「常に増して雄々しい姿よ」

春日皇后は微笑み、立ち上がって影皇女に歩み寄った。

「皇女よ、王宮の外に、百を越える兵が吾等が命を奪おうと囲んでいる」

影皇女は、笑みを消した。

「大王の命を救うため、吾等二人で討って出でる」

「まなじり 毗ひを引き締めて頷く皇女の肩を抱き、皇后は声を震わせた。

「闘おうぞ……吾等二人で」

「待て」

大王は立ち上がった。

「吾も共に」

「聞き分けのない大王なるかな」

皇后は叫んだ。

「ひよわな大王は、おとなしく、ここにいよ」

「吾がひよわなると？」

ひよわ。その言を聞いたのは、どのくらい前だったろう。廻り殺された押葉皇子であつたか……。ひよわな大王。そのとおり。まともに剣を振るうこともできぬ細い腕、酒に耽り萎えた胸板。子をなすこともできぬ男おのわらべ童のごとき大王。

うなだれた稚建大王を、春日皇后は腕を伸ばしてそつと抱き寄せた。

「汝はもはや、大王ではない。汝がひよわ故に、高志も且波も、汝を生かす」

春日の眼に涙が浮かんでいた。

「そこに、吾等が望みがある……」

言うなり、春日は、大王の鳩尾みなそおちを拳で突いた。呻いて身を折った大王の後頭部を、肘で打った。大王は床にくずおれ、動かなくなつた。

不思議な面持ちで二人のやりとりを見つめていた影皇女は、驚愕の叫びをあげ、床に伏した大王に駆け寄った。

「大王のためなるぞ！」

春日皇后は、叱るように叫んだ。

「汝が兄を救うためである！」

「あ……に……」

影皇女は、女童のように唇を半ば開き、眼前の皇后と、床に伏せた大王を交互に見比べた。春日皇后は頷いた。

「然り。かつて汝を暗い苦屋から救った汝が兄を生かすため……」

山の端から、神さびた日の光が漏れ輝いた。

父は、仕損じたか……。

大伴狭手彦は、重く動かぬ王宮の扉を見つめた。

背後の五十の兵は、すでに火矢を構えている。

あるいは、父なる金村はまだ、王宮の内に生きているかもしれぬ。火矢を放てば、父をも焼き殺すことになるかもしれぬ。しかし、逡巡してはならない。

これは政事……。狭手彦は自らに言い聞かせた。政事のためには、父も、かつてまぐわった皇后をも焼き殺す。そう決断する己に、狭手彦は陶醉していた。

背後を振り返った。山の端に、日輪が姿を現し、茜色の雲を白く照らした。

狭手彦は剣を抜き、高くかざした。刃が日輪の光を受けて煌めいた。

兵どもが弓を引き絞った。

そのとき、扉が重く響き、大きく開かれた。

狭手彦は、放てと叫ぼうとして、喉を詰まらせた。

「……待て」

弱々しく彼の口を出でた言葉に、兵どもは戸惑った。

扉が開き、現れたのは、美々しい甲冑を纏って現れた春日皇后と影皇女だった。

そして、影の皇女の肩には、後ろ手に縛られ、仰向けに担がれた大伴金村だった。

華やかな武装に彩られた女たちと、意識を失い、だらしなく両手を地に向けて垂らす一族の長の姿に、兵どもは息を呑んだ。

「狭手彦か！」

春日皇后は高らかに笑った。

「汝は、昨夜まぐおうた吾と、汝が父にして大伴の長なる金村を、共に射よと命じるのか」

狭手彦の頬が赤く染まった。

「汝は昨夜、吾に男根を吸われて歓喜の鳴咽を漏らし、赤子のように吾が胸乳に吸い付いたな。覚えているか、狭手彦よ」

「黙れ！」

「黙らぬ。そのまぐわいも、おそらく父の命を受けてのことであろう。吾を誅することを承知で、吾を抱いたか。見下げ果てた者よ、狭手彦」

「弓！」

狭手彦は両手を振り回し、身を大げさに振って兵どもに命じた。

「ただ独り、皇后を狙え！」

「汝が兵に」

皇后は、金村を担いだ影皇女に寄り添った。

「父や、皇女を傷つけることなく、吾独りを射る弓の上手はいるか？」

狭手彦が躊躇ったそのとき、皇后は、影皇女に目配せをした。

影皇女は、金村を振り捨て、剣を抜き、奇声を発して跳躍した。

着地したのは、大伴狭手彦の鼻先だった。振り下ろされた剣は、狭手彦の兜を、頭ごと真つ二つに割った。狭手彦は、額から血を噴き出し、絶命した。

血濡れた剣を手にした影皇女を眼前にして、五十の兵は悲鳴をあげ、二手に割れて後ずさった。

「皇女よ！」

春日皇后は、権高な笑みを浮かべて叫んだ。

「兵どもに構うな。行くぞ！」

さすがに、半ばは散ったな……。

春日皇后は、桃園の木の間を縫って歩きながら呟いた。

普段は重く感じる甲冑が、今日はひどく軽い。気が昂揚しているからだろうか。

胸の鼓動は激しい。だが、不思議と不安はない。むしろ、逢瀬を前にしたのと同じよう

な、高ぶりに、叫び出したい心地……。

傍らでは、大伴金村を担いだ影皇女が、窮屈そうに枝を避けつつ歩いている。

影皇女に睨まれ、尻餅をついて震える兵どもを尻目に、悠然と桃園に足を踏み入れたとき、二名の兵が慌ただしく門の方向へ駆けてゆくのが見えた。

門前には、さらに多い兵どもが待ちかまえているに相違ない。

「皇女よ」

春日は言った。

「おそらく、門を固める兵を率いるは、叔父の羽生。狭手彦のようにたやすくはゆくまい」  
右手を伸ばし、桃の枝を手折り、髪に挿した。訝しげに首を傾げて眺める皇女に、春日は微笑んだ。

「桃園から、桃の花が飛び出して斬りかかれば、兵ども、さぞ慌てふためくことであろう」  
さらに枝を身のあちこちに指す春日を見て、影皇女は腕を伸ばし、身の丈ほどに伸びた若木を、根本からへし折った。

「なるほど、よき楯である」

人の大きさほどもある枝を手にした皇女に、皇后は朗らかに笑った。

王宮の門の外は、物部荒鹿比率いる兵二百で、囲まれていた。

果たして、大伴金村に、己が娘を手にかけることができるのか……。

荒鹿比は、それが最善の策であることを承知しつつ、事の成否には懐疑的であった。あるいはそれ故、金村は門の外の囲みを、荒鹿比に委ねたのであろう。金村は、同族を信じ切っていない。

門の内を固めるのは大伴羽生<sup>は</sup>。勇猛だが、ヤマトの豪族や民の命運のかかった事態に、冷静な判断を瞬時に下せる男ではない。

もし、事が金村の策どおりに運んでいけば、今頃は、大王も皇后も影皇女も誅され、門内は歓声に包まれているであろう。もし、仕損じていけば、門内は兵のざわめきや、剣を撃ち合う喧騒が湧き起こっているであろう。

そのどちらでもないということは、金村が予想していなかった事態が、王宮の内できこつたに相違ない。

いずれにせよ、物部のやる事は一つ。

王宮の内より外に出でる者あらば、大王であろうと皇后であろうと皇女であろうと、あるいは大伴の者であろうと、躊躇うことなく矢を浴びせるのみ。

背後で突如、ざわめきが起こった。

「何事か！」

兵長<sup>いくみのおおき</sup>が駆けてきて、膝を突いた。

「怪しい女が二人、王宮に入れよとわめいている」

「女だと？」

「然り、かつてヤマトの大王家に仕えた史人、稗田阿礼と名乗っている」

突然桃園から、一本の桃の木が、花弁をまき散らしつつ、飛び出してきた。

兵どもが、反射的に矢を放った。矢は、桃の木の幹に刺さった。

幾十もの矢で飾られた桃の木が地にうち捨てられ、その背後から、朱塗りの甲冑に身を固めた女兵が、大剣を振りかざして突進してきた。たちまち、数名の兵が血飛沫<sup>ちしづみ</sup>をあげて倒れた。

「……影皇女！」

不意を打たれた大伴羽生は、命を下すのも忘れ、影皇女が縮れ髪を振り乱し、華麗に剣を振るって屍の山を築くのを呆然と見つめていた。

「やはり汝であったか！」

聞き覚えのある声に見れば、髪に、肩に、胸に、腰に、桃の枝を挿した春日皇后が立っていた。

驚く間もなく、羽生は股間に激痛を覚えてうずくまった。

「父の策など……透けるように見える」

皇后は、周囲を見回した。十幾の兵士が血にまみれて転がり、他の兵は怯えて後ずさりし、手出しをしようもしない。

だが、門の外にいるは、おそらく物部荒鹿比。彼ならば、逡巡することなく、父をも巻

き添えに、矢を射かけて来よう……。

「皇女よ！」

春日は、血に濡れた剣を擬して兵どもを睥睨する影皇女に叫んだ。

「もうよい。疾う、門の外へ！」

影皇女は頷き、桃園に向かって歩きはじめた。桃園には、気を失った大伴金村を転がしている。

「金村など、捨てておけ！」

叫んだとたん、春日は、背に熱い痛みを覚えた。

振り向くと、大伴羽生が、左手で股間を押さえ、苦痛に貌を歪めつつ、血に濡れた剣をこちらに向けていた。

その血は、春日皇后のものであった。

門のうちより、絶叫が轟いた。

門の外で、兵どもに囲まれた稗田阿礼と笹葉を尋問していた物部荒鹿比は、咄嗟に大声を張り上げた。

「構えい！」

兵どもが一斉に弓を引き絞り、門に向けた。

股間を蹴られつつ、皇后の背中を斬った大伴羽生は、駆け寄った影皇女によって、血塗れの屍と化した。

影皇女は、地に倒れた皇后の軀を抱きかかえ、さらに咆哮した。

その背に、幾十の矢が唸りをあげて飛んできた。

ああああああああ！！！！

門の外で、稗田阿礼が叫んだ。

「阿母、如何した！」

駆け寄った笹葉の腕を掴み、その掌に、阿礼は手のない腕の先端で文字を書いた。

「吾田媛……？」

笹葉は、阿礼の貌を覗き込んだ。阿礼の貌は悲しみに歪み、眼尻から涙が噴き出している。

阿母が泣いている……。

一瞬胸を詰まらせた笹葉は、ゆっくりと問うた。

「あの声は、吾田媛と？」

阿礼は何度も頷いた。

「吾田媛……？」

物部荒鹿比は訝しげに呻いた。

「何故に、吾田媛？」

笹葉に抱きかかえられつつ、阿礼は四肢を動かして暴れた。もはや、笹葉の掌に文字を書き余裕もなく、口を開けて言葉にならぬわめきを発した。

「阿母！ 阿母！」

笹葉は、阿礼の耳元で怒鳴った。

「分からぬ！ 阿母は何をしたい！」

門が開いた。

物部の兵どもが一斉に弓を引き絞った。

影皇女が、血塗れの春日皇后の屍を肩に背負って立っていた。皇女の背に、皇后の全身に、針鼠のように矢が立っていた。

新たに矢が放たれた。

鏃<sup>やじり</sup>はすべてまっすぐ、美々しい甲冑に身を固めた二人の女に向かって飛んだ。

日が冲天<sup>ちゅうてん</sup>に昇るころ、三百の兵を率いた葛城韓媛<sup>かつらぎのからゆめ</sup>と鹿虫<sup>しかむし</sup>が、王宮の門前に現れた。

門前を護る物部荒鹿比以下の兵どもは、皆、剣を外して一ヶ所に積み上げ、額を地に伏して、新たな支配者の先駆けを出迎えた。

「物部荒鹿比なるか」

韓媛は馬より降り、歩み寄って膝を突いた。

「すでに、春日皇后は討たれたと聞いた」

「然り」

荒鹿比は、塀際に並べられた屍に眼差しを向けた。影皇女が倒した幾十の兵、大伴羽生、大伴狭手彦。少し離れて、筵<sup>むしろ</sup>に覆われた一つの屍があった。

「あれが……」

韓媛の声音がかすかに震えた。

「春日皇后か」

「然り……さらに、影皇女」

「葛城韓媛よ」

未だ馬上の鹿虫が言った。

「吾等は、皇后や皇女の貌を知らぬ。汝が確かめよ」

韓媛は頷き、筵をかぶせた屍に近寄った。筵をめくった。すでに、矢は引き抜かれていたが、貌に幾つもの鏃の跡が生々しく、韓媛は眼を背けた。

「確かに、春日皇后と影皇女か？」

気ぜわしげに問う鹿虫に、葛城韓媛は頷いた。

背後の高志の兵が、一斉に矛<sup>ほこ</sup>を突き上げ、歓声をあげた。

「鎮まれ！」

しばし兵の騒ぎを笑みを浮かべて見守っていた鹿虫の声に、兵どもは静まった。鹿虫は、

荒鹿比に問うた。

「稚建大王はいづくに？」

「病にて、王宮の奥にて臥せておわす」

「大伴金村は？」

「皇后に抗われ、深手を負い、住吉の邸にて臥せている」

「誰か、疾う比叡に報せを！」

傍らの兵長が領き、馬首を返して駆け去った。

「門を開け！」

鹿虫の声に、物部の兵どもが門の扉に取りつき、開け拵げた。

三百の高志の兵が足並みを揃えて門のうちに入ってゆく間も、韓媛は、沈んだ面持ちで二人の女の屍の傍らに佇んでいた。

「恨みは、癒えたか」

ふと、間近に人影が立った。

満智だった。

韓媛は無言で首を振った。

「やはり、皇后独りとはゆかなんだ……大勢、巻き添えにしたな」

「軍だ」

韓媛は呟いた。

「人の死なぬ軍などありえぬ」

「ここに来る道すがら聞いたが、大伴金村は、皇后を絞め殺そうとして抗われ、股間をしただかに蹴られ、ひどい熱にうなされているようだ。いずれにせよ、己が娘を手にかけてうとした父親、政事を中心に返り咲くことはもはやあるまいよ」

韓媛は、聞いてか聞かずしてか、白雲たつ澄んだ青空に、虚ろな眼差しを彷徨<sup>さまよ</sup>わせていた。

「汝が一族を滅ぼした敵は、すべて死ぬか、<sup>すた</sup>廢れた」

「恨みは癒えぬ。だが、何時までも恨みに<sup>こたわ</sup>拘わっているわけにもゆかぬ」

韓媛は、満智を見つめ、笑みを浮かべた。

「汝も、吾が夫<sup>せ</sup>となるからは、ただの満智でいるわけにもゆくまい。何か、姓を名乗れ」

飯豊が、高志と旦波の王を伴い、七百の兵に護られ難波の王宮に入ったのはその七日後だった。すぐさま、稚建大王は大王位を飯豊に譲り、以後は稚建<sup>わかたけるのみみ</sup>王と称した。

ヤマト、高志、旦波は連合して一つの大和となった。

満智は、飯豊大王より蘇<sup>そ</sup>我<sup>が</sup>の姓を賜り、豪族に列せられた。

笹葉は、史人として王宮に侍することとなった。

さらに、王都を難波から飛鳥<sup>あすか</sup>に遷すとの詔が出された。

「飛鳥から去るといふのか」

新しく建てられ、生木の匂いの強い王宮の一室。

稗田阿礼は、笹葉を伴い、飯豊大王と向かい合っていた。

頷く阿礼に、飯豊はさらに言った。

「これまで国の史は稗田の家が独り司<sup>つかさど</sup>ってきた。これよりは、文字を使える者を集め、竹簡を整理し、新たな史を編ませたい。その宰領を、阿礼、汝に任せたい」

「伝えるべきことは、笹葉にすべて伝えた」

阿礼が、傍らの桶の砂に書いた文字を、笹葉が読み上げた。

「吾は、比叡に戻り、再び山で生きる」

「しかし、その身で……」

飯豊は、言いかけて口を嚙み、息をひとつ吐いて微笑んだ。

「汝は王宮のうちにいるよりも、外にいて、この世のあらゆる事どもを眺めていたのだな」

阿礼は、満面に笑みを浮かべ、深く頷いた。

「比叡の山中の、汝が望む場所に、家を建てさせよう。よいか？」

頷く阿礼に、飯豊は安堵したように相好<sup>そうこう</sup>を崩し、さらに笹葉を見て言った。

「独りで山に生きるは難儀も多かるう。笹葉は、しばし吾が側に留まってもらわねばならぬ。誰か、気はしのきく者を伴につけよう」

首を振りかけて、ふと、阿礼は思索し、やがて桶に文字を書き始めた。  
あえて伴うならば……。

王宮の門の扉が開き、阿礼に寄り添って出で現れた笹葉は、まぶしげに新しい王都を見回した。王宮の周囲には、新たに設けられた官衙や、豪族どもの邸が次々と建てられつつあり、忙しく行き交う人々で活気づいている。

不意に、阿礼が笹葉の腕を掴んで引き寄せた。

「どうした、阿母」

阿礼は、笹葉の掌に、腕の先で文字を書いた。

……飯豊大王は聡い。しかし、国の史とはその時々都合で歪められるもの。

「難儀だな」

笹葉は、苦々しく笑った。阿礼はなおも書いた。

……偽りの史実に、如何に真実を混ぜ、後の世の者に伝えるか、その術はある。史が歪められそうなことがあれば、比叡まで来よ。

「わかった。阿母」

笹葉は頷き、阿礼の腕を抱いて歩きはじめた。

さらに一月の後。



蟬がやかましく、青葉に覆われた深山に鳴り響いていた。

比叡の山中、轟々と山の頂より切り立つ崖を割って水が注ぎ落ちる滝壺の水辺に、王となつた稚建が佇んでいた。

「初めてその名を、汝から聞いたのは、ここであつたな」

傍らの大石に腰をおろした稗田阿礼は、懐かしげに滝の音に耳を傾けていた。

「吾田媛……吾が母」

稚建王は、阿礼に並んで膝を折った。

「吾が母について、さらに知りたい」

阿礼は、顔を稚建に向けた。

「汝もさらに知りたいであろう。吾や影皇女……吾田媛の子等のことを」

春日皇后と影皇女が、王宮の門にて討たれたことを知った後、稚建は自害をはかった。

周囲の者どもに止められ、手足を縛られ、数日、監禁され、いましめを解かれて初めて飯豊大王に会った。

誰も死なせたくはなかった……

稚建の前に、額を床につけて謝す飯豊を、不思議な面持ちで見つめていた稚建に、高志の王が病床の相伴金村の言を伝えた。金村は、春日のみならず、影皇女や稚建をも誅するつもりであつた。己が仕損じれば、外の兵に火矢を放たせ、三人ともに焼き殺すつもりであつた。春日は、父の意を見抜き、自ら武装して影皇女とともに討つて出ること、大王

の命を救つたのだ、と。

皇后の意を無にせぬよう、生きよ。涙を眼にためてそう説く飯豊を、稚建は悄然と見つめていた。

「稗田阿礼よ」

稚建は、滝壺から沸き上がる水煙を見つめながら言った。

「春日は……やはり、ヤマトを傾けた悪逆の罪人として、史に記されるのであろうか」

阿礼は応えなかった。

「春日を、あのようにしたのは吾……春日は、ただ吾を守ろうと……」

阿礼は笑った。枝を拾い上げ、地面に文字を書いた。

……春日はかのように生きた。汝も、かのように生きてきた。それを善とするか悪とするか、人は様々に言うであろうが、稚建にとって春日は良き妻であつた。

「然り」

稚建は微笑んだ。

「吾は……よき妻と、よき妹を得た。愛でられ、慈しまれた」(2004年5月19日)

あとがき

この「影なる皇女」は、「日輪の王国」「女神の末裔」につづく、三部作の締めくくりと考えています。「日輪の王国」を書いたのは二〇〇〇年の九月、「女神の末裔」は二〇〇一年の正月でしたから、あしかけ五年かけたことになりましたが、「女神の末裔」以来、四年も空いてしまったのは、理由があります。

この作品は、『日本書紀』の武烈天皇の条から着想を得ています。武烈天皇は、子をなさぬまま若くしてなくなり、いったん皇統は絶えたため、現在の福井県に住んでいた応神天皇の五世の孫が迎えられ（継体天皇）、新たな王朝が始まるわけですが、武烈天皇の八年にわたる治世は、ほとんどが暴虐の記事で埋め尽くされています。

いわく、妊婦の腹を割いて胎児を見た。人の生爪を抜いて山芋を掘らせた。人の頭髪を抜いて樹に登らせ、その樹を切り倒して落とし殺した。人を池の堤の樋の中に入らせて、外に流れ出るのを矛で刺し殺して喜んだ。人を樹に登らせて、矢で射落として笑った。女たちを裸にして平板の上に座らせ、面前で馬と交尾させ、陰部が潤った女は殺し、潤っていない女は婢とした……。

初めて『日本書紀』を読んだのは高校生のとき、ちょうど『カリギユラ』という映画が日本で公開されたときでした。暴君として知られるローマ皇帝カリギユラの生涯を、過剰

なエロスと残虐場面を盛り込んで描いたゲテモノ映画で、私は観ていませんが、親がとっていた週刊誌のグラビアで、ストーリーのおおよそが写真付きで紹介され、生唾のみこみながら親に隠れて読みふけりました。カリギユラは最後に暗殺されますが、武烈天皇もまた、臣下のクーデターによって密かに謀殺されたのではないかと想像を膨らませ、いつか小説にしてみたい、と思ったものです。

『日本書紀』の武烈天皇の条は、現代語訳の文庫本で九ページにわたる短さですから、そう長いものにはなるまい、とたかをくくっていたのですが、さて書き始めようとすると、なかなか進まない。

基本的にB B小説ですから、男の睾丸を蹴ったり潰したりするヒロインがいなければなりません。そこでまず、即位する前の若き皇子が、サディスティックな豪族の娘（後に皇后になる）の手ほどきを受け、睾丸を痛めつけられる快楽を覚える場面を最初に入れようと考えつきました。

ところが、そこで話は展開しなくなりました。何より、私自身は、女性が睾丸を蹴るのを「見る」のは好きだけでも、蹴られて楽しむ体質ではない。有り体に言えば、睾丸を蹴られて喜ぶ男性の気持ちがよく分からない。分からないから、つい、マゾヒスティックな愉悅に目覚めるプロセスをながながと書かねばならない。蹴られる側の心理を細かく描くとすると、今度はバランスをとるために、蹴って楽しむ側をもそれなりに細かく描かねばならない。

「日輪の王国」や「女神の末裔」の場合、男の隼丸を潰すポジティブなヒロインが、王朝を滅ぼす物語でした。ところが今回は、主人公は受け身の存在であり、滅ぼされる王朝の側に身を置いています。滅ぼす側は、自らの内面などいちいち振り返りはしません。しかし、滅ぼされる側には深刻な内面の葛藤があり、葛藤があつて行動がない。だからこそ滅ぼされるわけで、内面を描くのは、行動を描くより、より多くの文字が必要となる。

こうして、たぶん「日輪」や「女神」の半分くらいかなあ……という目論見で書き始めた物語は、半分どころか倍に近い分量となつてしまいました。即位した武烈天皇のサディスティックな暴虐場面は消えてなくなり、それどころか王宮の奥に籠もつて書を読みふける始末。さらに、「女神の末裔」から十数年後という設定にしてしまったため、前作から引き続き登場するキャラクターたちが勝手な暴走を始め、さつさと消してしまうはずだった息長皇后はしぶとく生き残り、主人公と一度だけ会わせて終わりにするはずだった稗田阿礼は、厚かましくもラストシーンにまで顔を出し、新しく登場させたキャラクターたちを振り回しつつづけ、話を收拾させるために新たなキャラが必要となり……というわけで、これまで書いたなかで最長記録を達成してしまいました（とはいえ、単行本にすれば三百ページほど。年に何作も長編を世に送り続けるプロの作家は偉いものだ、改めて感じ入りました）。ともあれ、まだ高校生だった頃に思いついたアイデアが、まったく形を変えて、とりあえずは形になりました。お読みただいて感謝します。